



■ 一瞬の針先 ■



太田聴雨「種痘」(1934年)

京都市京セラ美術館

着物姿の女性が清潔な処置室の椅子に腰かけ、着物の振袖をからげて、白い二の腕をすっと出しています。

そして、和服に白衣を身に付けた医師が、その腕を支えながら、右手に持った種痘針を、今まさにその白い腕に打とうとしています。この傍らには、器具を置いた処置台がわずかに見えます。

二人の瞳が、その針先の一点に吸い寄せられ、息をのむ緊張した空気が流れていて、二人の女性の抑えた息づかいが迫ってくるようです。

この日本画は、太田聴雨（1896～1958年）の「種痘」と題する作品です。近代医学の粋と日本伝統の美を静謐な構図と端正な筆致で、簡潔な画面に一体化しています。日本画の近代化が模索されていた当時、新世代を代表する作品として注目を集めました。種痘という近代医学史の苦闘の一断面をテーマとしていて、近代と伝統との相克に激しく揺れ動いた日本画の新しい時代を予告しています。

種痘とは、天然痘ワクチンの接種のことです。天然痘（痘瘡・疱瘡）は、数ある感染症のなかでも、人類史に大きな爪痕を残してきました。天然痘は、紀元前より感染力が非常に強く、死に至る疫病として人々から恐れられていました。

日本には、仏教伝来とともに大陸から九州に持ち込まれたと言われています。江戸時代になると、連年絶えず流行するようになり、明治時代になってからは、政府が強制的に種痘をする方針を定めました。種痘の普及を各府県に通達するとともに、この予防接種を行う医師を免許制としました。

■ 奈良の大仏と天然痘 ■



東大寺大仏 毘盧遮那仏 びるしゃなぶつ

天然痘 (smallpox) は、突然の熱発とともに頭痛や四肢痛、小児では嘔吐や意識障害といった症状が現れ、重症化すると喉が焼かれたような激痛が走り、物を飲み込むのも困難になり、呼吸障害を発して死に至る感染症でした。致死率は20～50%とされましたが、幸運にも治癒に向かった場合は、2～3週間程度で膿疱がかさぶたとなって脱落します。しかし、皮膚に色素が沈着し、生涯にわたって痘痕となって残りました。天然痘は紀元前から死に至る恐ろしい疫病として人々に恐れられていて、古代エジプト王朝のラムセス5世も、そのミイラを研究したところ天然痘を患っていたことが判明しています。

日本にも仏教の伝来と共に大陸から九州に持ち込まれたと言われ、それがやがて平城京にまで達して大流行し、当時の政治の中枢にいた政府要人の多くも天然痘の犠牲となりました。聖武天皇は、人の容姿を激変させて死に至らせる謎の疫病と天候不順による飢饉など、当時の社会不安や政治的混乱から脱却するため、仏教の力に救いを求めました。そして、東大寺に巨大な仏像を建立したのが奈良の大仏です。

■ ジェンナーによるワクチンの開発 ■

イギリスの医師ジェンナーは、牛から感染し発疹ができる牛痘という病気にかかった人は、その後、天然痘にはかからないと言われていたことをヒントに、1801年に「ワクチンの接種の起源」の論文を発表しました。ワクチンとは、毒性を弱めて安全な形にした病原体（ウイルスや細菌等）のことです。最近は病原体の遺伝物質を合成して作るワクチンもあり、これを注射することで、人体にその病原体への免疫ができ、感染を防ぐことができます。

我が国では明治年間に、2～7万人程度の天然痘患者数の流行（死亡者数5,000～2万人）が6回発生しています。第二次大戦後の1946（昭和21）年には18,000人程の流行がみられ、多くの方が亡くなっていますが、緊急接種などが行われて沈静化し、1956（昭和31）年以降には国内での発生はみられていません。



電子顕微鏡が捉えた天然痘ウイルス

1977年、ソマリアにおける患者発生を最後に地球上から天然痘は消え去り、その後2年間の監視期間を経て、1980年5月WHO（世界保健機関）は天然痘の世界根絶宣言を行いました。その後も現在までに患者の発生はなく、天然痘ウイルスはアメリカとロシアのバイオセーフティーレベル（BSL）4の施設で厳重に保管されています。

私たち人類を苦しめてきた感染症の中で、最初にワクチン開発に成功し、そして、その封じ込めに成功したのが「天然痘」です。2年前から流行している新型コロナウイルス感染症には、今のところ特效薬はありませんが、大多数の人が予防接種を受ければ、ウイルスは感染先を見つけられなくなり、流行は収まっていくだろうと、収束のカギとしてワクチンに大きな期待が寄せられています。新型コロナウイルス感染症対策は、今後どうなるのでしょうか？ 100年後、200年後には、どのように語り継がれていくのでしょうか？